



日本記者クラブ

## 記者ゼミ 第4回

アジア・中国編④

# 庶民から見た中国社会

フリージャーナリスト

麻生 晴一郎 氏

2013年7月25日

©公益社団法人 日本記者クラブ

**司会：吉田克二・特別企画委員** きょうはフリージャーナリストの麻生晴一郎さんをお招きしました。麻生さんは、中国の底辺、その生活に溶け込んで、ルポや分析を書いてこられました。『こころ熱く武骨でうごった中国』（情報センター出版局）や、最近では『中国人は日本人を本当はどう見ているのか？』（宝島社新書）など、10数冊の著書があります。そういう経験を交えて、「庶民から見た中国社会」というテーマで話していただきます。

### 庶民像がはっきりしない

**麻生晴一郎・フリージャーナリスト** 紹介していただきましたように、最近中国の内陸部に通って、いまの中国の中で、「市民社会」といわれるものを主にしている者です。

中国を捉えるうえで、僕はまず時代に着目しています。中国の場合、80年代、90年代、2000年代で、社会の変化が非常に大きい。それぞれの時代の発想にも違いが出てくるので、時代に着目をしていく見方があるのです。

もう一つ、僕が心がけてきたのは内的理解、つまり中国人がどう思っているのかを捉えます。僕の場合は、最初に中国に行った80年代に、ハルビンでアルバイトみたいなことをやっていて、出稼ぎ労働者の人たちとのつき合いが多かった。そういう中で、彼らがどう考えているのか、どういう問題意識なのかとか、どういう夢や不満を持っているのか、ということを理解してきた。そういう捉え方をしてきたのです。

ただ、中国人がどう思っているかを僕が理解して言葉にすることは中国人が考えていることとは必ずしも同じとは限らないと思います。

きょうは「庶民から見た中国社会」というテーマなので、まず中国の庶民について話をしたいと思います。

中国の庶民といった場合、「老百姓（ラオパイシン）」とか、いろいろ言い方は考えられるのですが、どうしても、どういう人が庶民なのか非常にわかりづらい面があるのです。一党独裁体制の中で「人民」と言われる人たち、という括りはあっても、では、そういう人たちがどういう体型をしていて、どういう性格をしていて、どんな顔をしているのか、庶民像があまりはっきり見えてこない。

日本の平均的国民像というと、いろんなパターンがあるでしょうけれども、一つ考えられるのは、朝、満員電車に乗って、眼鏡をかけていて、スーツを着ていて、帰りは新橋でやけ酒を飲むみたい

な、そういうイメージです。週末は子どもたちと遊園地に行くのに追われるみたいな、こういう国民像が、中国の場合、形成できていない。

国民的ヒーローは誰なのか・・・いろんな人に言わせると、おそらく唯一出てくるのは毛沢東だと思います。日本で力道山や長島茂雄にあたる人と言っても、毛沢東ぐらいいしか浮かんでこない。こういうことも今後、中国が民主化をしていくうえで壁になると思うのです。

例えば1970年代の中国における国民共通の了解と言えば、文化大革命だとか政治的なものばかりです。一党独裁の下で、平均的国民像は結局、中国共産党に従っている人だけみたいになる。イメージが希薄で、国規模の世間なり、国民文化と言うべきものが出てきていない。

そういうわけで、いま、そうしたものが模索されている。主にインターネットとか、そういうメディアの中で、割とスター的な人が出つつある。例えば言論空間ではアーティストの艾未未（アイ・ウェイウェイ）さんとか、そういうスターが模索されている状況にあります。

これは安徽省の田舎、農村で撮った写真です。中学の昼休み、飯を食べるため、生徒1万人が外に出てくる。野球か何かの試合の帰りみたいに、バーっと人が多いのです。僕は出身が大分県で、いま弟が大分の杵築という農村にいて、その娘の小学校は1学年に2人しかいない。日本の農村は人口が少なく静かで、というイメージがあるけれども、中国の場合、人口が全然少くないのです。

大都市の北京、上海の人口を足しても、全体の10%にも満たない人口しかないわけです。だから、日本みたいに首都、大都市への集中ではない。農村に非常に人口が多い、そういう違いがあるのです。

だから、中国の農村で反日デモに1万人も来てすごいじゃないかと思うかもしれないけれども、むしろ農村だったら1万人ぐらい平気で集まるのではないかとすら思えるところがあるのです。

北京の郊外に行くと、貧困な地方出身者の集住地域がたくさんあります。北京で反日デモが起きた時でも、デモの参加者が北京の人なのか、あるいは貧困な地方の出身者なのかによって、全然違うと思うのです。生活習慣も違う。

一つの庶民像といった場合に、貧しい出稼ぎ労働者を中心に据えていくのか、上海とかでコスプレにはまっているような人を中心にしていくのかで大分違ってくると思います。

## 「変わっていく」感じあった 80 年代

では、80 年代、90 年代、2000 年代と、時代はどうだったかを、ざっと見ていきます。

大学生、都市労働者、農民に分けて話しますと、80 年代という時代は、大学生や大学卒業生の就職は自由ではなかったのです。卒業するときに、国家配属といって、「あなたはどこそこの小学校の先生になりなさい」とか、そういう時代で、ただしお遣いみたいなものがもらえる。1990 年代の初めまでそうだったのです。

いまの中国は、経済に関しては割と自由化しているけれども、政治に関しては全く自由化していない。そのことを、中国人も知っているし、外国人も知っているけれども、80 年代はまだ誰もそういうふうには考えませんでした。政治的にも自由化していくのではないか、みたいなことが目指されていた時代だったので、公務員になったり大学の先生になったり、いわゆる体制内で働いてても、民主化を目指す人がいたような時代なのです。

給料はそんなに優遇されていたわけではなかった。大学の先生といたら、路上で卵を売っている人よりも給料が低いと、よく言われていた時代です。一方、憧れだった欧米文化が文化大革命が終わってしばらくしてどーっと入ってきて、学校で先生の授業をあまり聞かないで、髪の毛なんかわざと伸ばして、ギターか何かができるような男の子が一番もてた。そういう時代でした。

都市労働者は当時、みんなどこかの職場に属していました。何とか印刷工場とか、何とかバス会社とか、そういうところでは学校も職場の中にあって、住宅も提供されて、病院も何もかも完備していた。僕が最初に中国に行った 80 年代はまだ配給制があり、たばこもピャオ（票）がないと買えなかった時代だったのです。

中国は、いまもそうですけれども、出世をするためには党の幹部になることが必要です。企業の中にも党の組織があって、党幹部会議とか党員の会議がある。組みたいなものですけれども、党の幹部にならないと、なかなか出世をしていきません。社会活動も、職場である党の組織を離れて自主的にボランティア活動をするといったことが党の方針に反しているようで非常にやりづらかった。

給与や生活のレベルはあまり高くない。外国人に憧れがあり、僕なんか全然お金があったわけでもないのに、上海で歩いていると金持ちみたいに思われてしまう。そういう時代だったのです。

農民の場合は、社会福祉の対象ではないわけです。中国の社会福祉は職場をもとに成り立っていて、農民には職場がないですから。

戸籍制度があって、都市の住民と隔離されている。その中で、都市への移動の制限がしだいに緩んできて、出稼ぎ労働者が増えてきた。

僕が最初にハルビンに行ったのがそういう時代だったのですけれども、出稼ぎ労働者が最初は、食堂の従業員とか、いわゆる底辺的な仕事をするわけです。お金がたまり出すと、今度は行商をする。例えば広東省で買った靴をハルビンで売って、1 足当たり 10 元もうかっていく。それでお金がたまると、今度は露店ではなく商売用のブースを作ったり、店を構えたり、もっとうまくいくと食堂を開いて、それもうまくいくとホテルを建てる。そうやって成功する人も出てきたのです。

80 年代というのは、国全体として非常に理想主義的な、何か自分の生活が変わっていくみたいな、そういう時代だったと言えます。

## 2000 年代から公務員の時代に

90 年代になると、大学生の就職も自由化しました。公務員よりも、むしろベンチャー、民間企業に入ったり、アートなど自由な活動や留学をしたり、挑戦をすることがもてはやされる時代になっていくのです。市場経済化が本格的に導入されていたときで、中国の国内の公務員になるよりも、外資系企業で働いたほうが給料が高いという感じがある。欧米の人が中国の官製の美術界で認められていないアーティストの絵を買うとか、市場経済がワーっと入ってきた時代なのです。

国有企業の合理化が激しい時代で、黙っていても、だんだん福祉がなくなっていく。何か行動したほうがもうかるのではないか、行動しないと逆にどんどん福祉が切り捨てられるのではないか、みたいな時代だったのです。

そういうこともあって、90 年代はベンチャーとか民間とかが出てきた時代で、これが 2005 年ぐらいまで続いていくのです。

ところが、2005 年頃から、公務員の給料が充実し始めた。それまで初任給が 1,000 元少々ぐらいだったのが 2,000 元になり 3,000 元になり、どんどん上がっていく。しかも、職場の経費を使ってサイドビジネスをするようなことが多いわけです。

中国にはたくさん民間企業があるけれども、実は政府の人が政府の経費でつくっている民間企業がたくさんあるのです。政府の経費でつくり、

失敗したら政府のせいになって、成功したら自分のものになる。そういうこともあって、公務員の待遇が非常によくなっていったのです。

一方、大学生、都市労働者、市民の立場で言うと、ベンチャーがだんだん成り立たなくなってきた。例えば、最近の中国では家を買うのは非常に難しくなってきた。2003年～05年ごろは、「家を買わないなんてばかじゃないか、どうせ2年後には倍になっているのに」みたいな時代だったのが、いまはそうではなくなってきたのです。就職も難しい。河南省あたりの大学を卒業すると、就職率は50%いかない。そういうふうになってしまったのです。

80年代からみると、だんだん公務員が浮かべられる時代に変化し、それが定着していった。出稼ぎ労働やチャレンジが90年代ぐらいまではもてはやされていたけれども、いまの中国は閉塞的な世の中になってきた。ここ30年ぐらいでそういう変化があるのかなという感じがするのです。

政府との関係では、80年代では就職の自由もほとんどないですから、都市の人の場合、政府から外れたら生計手段がないわけです。当時は、例えば大学を勝手にやめて家庭教師として生きていくというような人はほとんどいない。フリーのライターとか、ほとんどいない。ただし、政府と関わることで、理想の社会とか民主化の実現とか、そういう可能性もあった時代だったのです。

ところが、6・4、天安門事件の後ぐらいから、中国の政府はだんだん保守的な面が明白になってきた。政府の中では、民主化の実現を考えるとなどが非常に難しくなって、政府から離れたところで、例えば中国民主党みたいな民主化運動が、辺境で存在するだけになっていった。

一方で、公務員をやめて、民間企業をやっていくとか、海外に留学していくとか、そういう市場経済化の中で生きる傾向が出てきた。ところが、市場経済化も次第に政府が取り込んでいくようになって、やがて政府が一番市場経済化しているようになっていくわけです。

2000年代になると、政府との距離に収入が比例する社会、つまり政府の職員とか、政府に親しい人ほど収入が高いという社会に変わっていったのです。

悲観的な話をするそうだけれども、一方では、理想の社会の実現や、社会を改善すべく、庶民がインターネットなどで政府に堂々と意見を言う動きとか、政府だけに任せてられないとの動機での市民活動、ボランティア活動も、00年代か

ら出てきている。そういう変化も一方であると言えます。

### 政府と民間の距離が拡大

いま中国の中で、人心の荒廃とか、倫理の面の問題がよく論じられるけれども、家族内とか友人間とか、そういう中では彼らの多くはとても親切で気前がよい。中国人とつき合った人は同じような感想を持つ人がいると思うけれども、農村などに行くと、ものすごいご馳走を振る舞ってくれる。

僕など、四川省の農家へ行くと、彼らが普段は口にしないような料理を大量に振る舞ってくれるし、日ごろから絶対裏切らない。家族思いだし、親孝行。最近、親孝行じゃないとか、いろんな問題も出てきているけれども、少なくとも日本に比べれば、そういう面での倫理は発達しているのではないかと思うのです。

友人間のマナーもすごいのです。友人の間で、こういうのはちょっと失礼じゃないとか、そういう気遣いも結構あるのです。相手を立てなければいけないとか、食事の席でのマナーとか、実はいろいろあるのです。

でも、そういうものが社会の中で、集落とか村とか県の中となると、全く発揮できない。農村で一步外に出てみるとごみが放置されて、誰も片づけない。自分の家とか友達の家では、ごみを散らかしたりしなくても、村全体になると、あちこちで平気で捨ててしまう。

政府が看板を立てて、「文明的な都市をつくりましょう」と呼びかけても、その看板の周りをごみだらけになっていく。身の回りの世界から離れた一般社会、公共の場のような空間に行くと、倫理とか礼儀とか、そういうものが発揮されていないのがいまの中国ではないか。

中国の人は大義名分とか名目を重視するけれども、集落とか村とか県とか公共空間になると、何十年もの間、公共のことを全部、政府に任せてきてしまった。もちろん任せきりにした人々にも問題もあるけれども、一党独裁体制が原因で政府任せにしてきた。

ところが、いまの中国の政府に、大義名分はなかなか見えてこない。政府がもうかるという以外の社会目標がなかなか見えてこない。一般社会、公共空間というものの運営がひたすら政府任せで、その政府が自らの金もうけしか考えていないのだから、そういう中で、倫理とか礼儀とか、そういうものの荒廃が問題視されるような出来事が起きているわけです。

こうした現状を憂える人たちの間から、公民社会という政府から独立した市民社会、つまり政府がどんなに乱れていても、電車が時間どおりに出る、時間どおりにパン屋さんがパンを売っている、そういう社会が求められ、叫ばれている、と言えると思うのです。

政府と民間の距離が非常に拡大しているのが、ここ10年ぐらい、21世紀に入ってからの中国の一つの傾向です。

まず、貧富格差。日本では貧富格差といった場合に一番問題になるのは、政府がろくな政策をしていない、政府が「貧」の人を切り捨てるような政策をしている、といったことだと思うのです。

ところが、中国の貧富格差というのは、むしろ貧富の「富」が基本的には政府であるといった問題なのです。政府だけがもうかっている、そういう格差なのです。特に上海なんかに行って大金持ちの人をみると、政府と絡んでいたり、企業自体が政府の関係企業であったりするわけです。政府の関係で利権を持っているような人たちが「富」にいる、そういう貧富格差なのです。

金もうけをする一方、環境破壊とか外交の面において、中国政府、共産党がなかなか有効な対策をしていない、庶民がそういうふう感じてしまうところがあるのです。政府だけだったら、この国はだめになってしまうみたいな問題意識が庶民の間から出て、ネットの政府批判的な言論につながっている。

暴動は、実態がわかりづらいけれども、増えていることは明白です。昔だったら、政府と関わるような事件だったら泣き寝入りすることが多かったけれども、堂々と言うようになった。そんなわけで政府のありかたを批判する庶民も出ているわけです。

中国の政府は昔から権力を集中していた。ただし、権力は集中していたけれども、かつてはお金は華僑や外国と関わる人の方が持っていると言われたように、80年代とか90年代は、党员といっても、権力はすごくあるが、収入が特に高いわけでもなかったのです。

ところが、いまは富も集中してしまっている。権力だけじゃなくて、お金も集中的に持ってしまっている。政府関係者にはチャンスも非常に多い。庶民からはそういう不満が出てきているわけです。政府になぜ不満を持つか。政府だけがもうかっているから不満を持つのです。政策が悪いという問題ではないのです。

日本で格差社会と言った場合、公務員ばかりを

攻撃することはなかなかないので、大分違うのです。そういうのを警察力で抑え込んでいるのが現状だと思うのです。

### 公共サービスへの信頼欠如

この写真は、広東省で民主化デモをやった烏坎村で、選挙の集計作業をしているところです。政府の人間が集計作業をやっているけれども、周囲の村民が政府の人間はうそを書くのではないかと疑って、みんなノートをとったり、ここは違っていると言ったりしているのです。何でこんな時間がかかるんだと文句をつけたりしている。政府が公共というイメージを持たれていない。こういうところがいま問題視されているのです。

安徽省に「常坤の家」という施設があります。高校生が身分証明書をコピーして提出したら、本を無料で貸してくれる。内陸部の農村の場合、図書館がなかなかない。あっても、住民の使用を禁じて、本を所蔵するだけだったりする。図書館が充実していないので、常坤という青年が高校生向けに、身分証明書を登録したら無料で本を借りることができるサービスを始めたところ、まず大変だったのは子どもたちが非常に疑ったことです。身分証明書を出したらただで本を貸してくれるというのはいさげではないかと。

こういう子どもたちや親にとってみれば、政府というのは自分たちをだまして金を取るみたいな存在にしか見えない。そういうふうにはか思えない政府ももちろん問題だけれども、そういうふうにはか思えない村民ばかりだったら、公共意識なんて出てこないのです。公共というものを信用できないのだったら、公共意識はなかなか出てこない。

このままではいけないと思った常坤が、公共意識が必要なんですよ、と伝えるために、身分証明書を登録したら本を貸してくれるシステムを導入したのです。こういうことをしないと、なかなか中国の市民社会は進んでこないわけです。図書館を寄附でつくればいいという簡単な話ではなくて、公共サービスは信ずることができるものだという信頼を何とか浸透させなければいけない、そういうレベルにあるのが現状なのです。

現実問題、このような民間人が身分証明書を登録したら本を借りられるようなシステムをつくとどうなるか。子どもたちは喜ぶかもしれないけれども、政府は嫌がるのです。なぜかという、政府にも教育部門があって、こんなのができると、おれたちの利権が奪われるのではないかと考え

る。「常坤の家」がたびたび運営を妨害されたように、こういう活動は地元政府の圧力を受けやすい。

政府から独立して、無料で民間の子どもたちのために図書館を建設するのは立派な社会活動です。けれども、政府から離れて社会活動することは、内容を問わず地元政府から妨害される場合がある。利権を侵害するとか、政府と違う組織をつくっているんじゃないかと疑われる危険性も出てきてしまうのです。

### 一党独裁体制に泣き寝入り

一党独裁体制はいろんな面があるけれども、いくつか考えてみます。

まず会社や社会の隅々に党組織があることが非常に重要です。中国の職場に行くと、新聞社でもいいですけども、割とできる記者の上に、できる記者よりも年も若く、仕事のにもそんなに優秀かどうかかわからないような上司がいる場合があります。党組織的にはその人が上だったりするわけです。毎週のように黨員同士の会議があって、あのかのときの記事はちょっと自由過ぎたんじゃないかと、怒られたりするわけです。そういう党幹部、中国語で「当官（ダングアン）」というクラスの社員になることが出世の道なのです。

企業だけでなく一般社会や公共空間となるとすべて政府が牛耳ってきましたから、男女平等とか労働争議とか、障害者の対策とか、そういう社会活動は、もともとは政府、つまり党を離れてやることはできませんでした。けれども、最近の政府は、そういう問題を放置してしまっている。金もうけにならないようなことはだんだんやらなくなっている、一方でそういう金もうけにならない障害者対策をやる民間の団体がたくさん出てきている。そういう団体に対しても、さっき言ったみたいに、いざ政府に都合が悪くなるといつでも潰せる準備ができています。

もう一つ問題なのは、政府や警察や検察や裁判所や学校やメディアというのは、いずれも共産党の息がかかっている場合が、地方なんかで非常に多い。

政府から何かひどい目に遭ったときに、それを裁判所に訴えても、裁判所と政府は仲がいい。警察も仲がいい。日ごろ飲み会をやったりする。「うるさいやつがいて、おれのことに文句を言っている」、「じゃ、今度こらしめてやるるか」みたいな感じになってしまうと、訴えようがないのです。メディアもみんな親しい。いわば同じ学校を出た

同期の仲間みたいなものですから、訴えるのは難しい。

当然、政府、警察絡みの事件は法で解決されにくい。昔は、泣き寝入りするしかなかった。でも最近では、それをあえて批判をするような人も、インターネットとか批判の手段も出てきた。政府のありように批判的な人が支援したり、そういう意味で風穴が少しあいてきてはいます。

### 品質向上より政府とつながり求める

あと一つは、中国ではなかなか業界団体が存在しづらい。普通の発想では、石炭の業界団体だったら石炭業の利益を守るための業界団体をイメージしますが、僕が取材に訪ねた中国の業界団体というのは、業界の利益とあまり関係ないのです。政府の組織なので、反日デモがどうだとか、そんなことを言い出すところで、なかなか業界の利益を守る団体が存在しづらい。

マンションの地域住民会といった地域団体も、なかなか存在しづらい。広東省とか北京とかで、だんだん出てきつつあるけれども、全体として見れば、日本の地方自治のような仕組みにはなっていないのです。

中国の多くの人の間では「愛国」という言葉はよく使われるけれども、人を愛するとか省を愛するとか、そういう言葉はなかなか出てこない。「救国」とか「愛国」とか、「国」は出てくるけれども、「愛四川」とはあまり言わない。そういうところも課題なのです。

商売やレストランなどで販路を拡大するために大切なことは、品質向上よりも政府との良好な関係になりがちです。例えば、パン屋さんが成功するためには、おいしいパンをつくる努力をすべきでしょう。おいしいパンをつくれれば、お客さんも来て、もうかる。でも、一党独裁の中では、そうはいかない。販路を政府が握っているわけですから、おいしいパンをつくるより、政府との関係を良好にしていってほしい方が、いろんな優遇が得られる。一方で、仮にそのパンの品質が悪くて食中毒事件を起こしても、政府との関係がよければ、黙って報道規制をしいてくれる。

いったんそのパン屋が問題になっても、劣悪なパンでもうけたお金を使って、今度は風呂屋か何かをやれば、それでもうかっていく。そうなるプロが存在しづらくなる、こういうところも問題だと思えます。

## 政治も社会も政府任せ

庶民と社会との関わりはどうだったか。

例えば、村の清掃。僕の知り合いが、都市の人なんですけれども、さっきの汚い、ごみだらけのところを清掃するボランティア活動を村でやったら、法輪功の関係者と間違えられて拘束されたことがある。これでは、余計なことは政府を離れてやるな、政治・社会は政府に任せよう、ということになる。

農村の場合、ここでは米を植えろとか、どんな肥料を買えとか、政府が言う。たとえ環境や作物に悪い化学肥料でも政府の命令は絶対です。どこに売るかといったことも農村の地元政府が決定する。

出産も、政策で左右される面がある。例えば、河南省は中国で一番人口が多いところなんですけれども、農村では40歳前後の女の人に子どもが2人いる家庭が結構多い。その場合、上の子が20歳ぐらいで下の子が15歳近くも離れて5、6歳といった組み合わせが多いのです。

なぜかという、厳しかった一人っ子政策が、10年前ぐらいから突然緩やかになった。出産年齢としてもぎりぎりだから、2人目を早く産めということになって、上の子が15歳ぐらいのときに下の子を産んだから、そういう年齢構成になる。政策によって出産まで決まってしまう面が出てくるのです。

政府絡みの被害、例えば政府に土地をとられたというようなとき、従来は泣き寝入りするしかなかった。

情報の面でも、中国のメディアというのは、社会の情報を得るといっても、何を話題にしているかを知るための手段です。例えば、人民日報の1面で「反日」と出てきたら、「ああ、『反日』は話題にしているんだ」みたいな、そういうメディアと考えるべきで、中学校の校内新聞により近いと言えます。

いまの中学生の考え方を知るために、中学校の校内新聞を読むという人はまずいないでしょう。校長先生の話とか、「野球部ベスト8」とか、そんなことぐらいしか出てこない。実際、中学生はネットで「あの女の子が好きだ」などと書いていたりして、こっちのほうが中学生の気持ちなのです。

中国の人民日報や新華社は、むしろ校内新聞に近いのではないのでしょうか。

市民社会とかNGOというと、日本では1970

年代ぐらいにはやった懐かしいものというイメージかもしれない。中国の場合は、市民社会というのが、政府から離れて活動する新しいものでもあり、危ないものでもある、そう捉えられている面があります。中国の中で「公民社会」と呼ばれる市民社会が意識され、政府から独立した社会をつくるべきだ、というモチベーションが出てきつつある。

例えば、自由選挙運動というのが去年盛り上がりました。選挙に自由に出るべきではないかという運動です。年々増加する地元政府や警察に対する暴動にしても、いままでは政府の言いなりになっていたけれども、そうではなくて、自分たちの権利を自分たちで守るというような意識が出てきているのです。

ところが、こういう公民社会に対して、地方政府は、さっきの「常坤の家」のように、利権が衝突すると考えたら弾圧する。一党独裁の堅持が前提なので、それが危うい時はいつでも規制をする準備がある。政府とか法律に支えられていない中で公民社会が台頭しているのです。

市民社会だとか民主主義だとか、選挙権とか、少なくとも僕の年代の日本人にとってありがたくも何ともないというか、むしろ迷惑な存在という感覚すらあったけれども、中国の場合、そういうものの獲得が非常に意識されてきつつあるのです。暴動が増えているのは一つの表れなのです。

内陸部の農村では、もともと村民は村のことを政府に任せきりだった。それがよしとされて、出稼ぎが主要産業でもあったわけです。でも、だんだん地方政府に対して自分たちの言いたいことを言うようになり、もっと村をよくすべきだという公民社会建設の動きも出てきている。そういうふうには、最近の農村も変わりつつあるのです。

例えば、昔はごみの山だった村で、村民たちが自分たちで川に流れている石を使ってごみの仕分場をつくりました。ただし、ごみの仕分場が有効に働くには、ごみをちゃんとごみ箱に捨てるべきだという意識が芽生える必要がある。仕分け施設をつくること自体は1週間ぐらいでできたけれども、道端にごみを捨てるべきでないとか、村をきれいにするために自分たちは何をすべきかといった、公共意識をつくるには3年かかったのです。

昔は、そんなことは政府に任せろと言っていた。政府はまず何をやるかということ、環境対策予算で「ごみは捨てましょう」みたいな看板をつくるのにお金をかけてしまう。そんなことをいくらやっ

ても、ごみの山は残ったままです。しかし、村民が自主的に活動することで解決した。自分たちで輪番制でやっていく意識を育てるのに3年かかったのです。そういう村が本当にたくさんあるのです。

### 市民社会を言う人に2タイプある

ここで注意しなければいけないのは、市民社会、市民社会とさっきから言っていますけれども、貧富格差や地方政府の問題に対して不満を持つ人たちには、2つのタイプがあるということです。

(A)徹底した社会主義をめざす(B)法治国家、民主化をめざす、の2つです。

いま、中国の人たちが市民社会とか、権利を主張すべきだと言いだしているのですが、ともすれば、中国は民主化に向かっているのではないかという発想になりがちですけれども、実は、農村なんかに行くと、Aのほうが多いのです。法治国家化や民主化よりも、まず徹底した社会主義をやってほしいという声が、農村なんかではむしろ多いわけです。

例えば、この写真は北京に陳情に来た河北省の農民たちです。彼らは、温家宝首相を尊敬している、温家宝首相にぜひ自分たちの惨状を知ってもらいたい、と言っていた。別に西側のメディアの人に話したいわけではないのです。だから、彼らは僕に、温家宝と知り合う方法はないかと盛んに聞くのです。そんなことは僕には知り得ないので、答えに窮したのですが、彼らにとってみれば、民主化とか法治国家化とかは、別にどうでもいいのです、それよりも文化大革命みたいなことをやってくれたほうが良いというような問題意識があるのです。

一方ではもちろん、もっと中国が三権分立とか法治国家化すべきだ、警察も法を守るべきだ、そういう民主化を主張する人もいます。どちらかというと、農村の中でもかなり西洋的に目覚めた人とか、都市民とか、そういう人に多い。

いま中国で起きている政府に対する暴動とかストとかデモとか、インターネットで政府批判的意見を言っている層というのは、A、Bの両者がごっちゃになっているのです。ともすればBの方向ばかりが目立つけれども、実はAの方が人数的には多い、と僕は思うのです。

他方で、いまだに政府に従順な人も多い。反日デモのときでも、とにかく政府の言うとおりにしようみたいな人がたくさんいるのです、そういう人も含め、まだ非常に混乱している面があるので

す。

とにかく公民社会の台頭で、権利意識が非常に拡大した。以前だったら泣き寝入りすることを泣き寝入りしなくなった。他方で身体障害者のための学校の施設をつくらないとか、政府は相変わらず多くの問題を放置している。

例えば、先ほどの中学校の場合、1クラス100人以上が普通なのです。図書館はあるけれども、『鄧小平文選』といった本しかなくて、誰も読まない。設備環境が特に恵まれていない中で、最近になって人口が突然増えたのです。だから、いろいろな施設をつくれといっても、政府だってそんな簡単につくれぬ。農村の政府は赤字財政のところも多くて、放置せざるを得ない問題が割と多い。

一方で権利意識も拡大して、他者や社会に働きかけたいという人たちの中で、NGOとかボランティアとか、いろいろな活動が出てきているのです。

政府というのはあくまで政府自身を守る。そんな中、公民社会は制度や法律の支えがあって台頭してきたと言うよりは、下からの民主化とでも言うべき性格を持っている。例を一つ挙げます。

5月に海南島で起きた事件です。こういう記事が出るということは、中国である程度報道が自由になっている面もあるのですが、5月8日に小学校6年生の女兒6人が校長に連れられ市内のホテルに行った。カラオケか何かに行き、酔っ払っているか、薬か何かを飲んだのか、酩酊状態で校長たちの部屋に行った。うち2人は途中で市の政府職員と別のホテルへ行った。後に法医立ち会いで検査したら、暴行の跡も見つかった、という報道です。

校長先生は政府の人間ですから、以前だったらこんなことがあっても泣き寝入りするしかない。それがいまは、権利主張をするようになった。保護者もちゃんと新聞取材に答えるようになっているのです。ただし、こうした報道が出るのは政府から支えられてのものではない。

この事件に際し、警察などは政府系の新聞でどんな話をしているか。全然言っていることが違うのです。まず、小学生6人が親しい校長に車でどこかへ連れていってくれとせがむ。校長は正義感から断ったが、1,000元のお小遣いだけはあげた。子どもたちは渋々、市内のホテルでお茶を飲んだけど、また校長と会いたくなつたのか、夜9時に校長をカラオケに誘い、校長は来た。校長と市政府職員は女兒とホテルの部屋で抱き合うなど親密行為のみ行い、性交渉はしていなかった。親密



行為だけだから問題ない。しかし道義上許されないから、2人を未成年少女わいせつ罪で逮捕する。こういう政府系の発表を受けて、別の地方紙は、最近の小学生の生活は乱れている、という記事を出したりしている。

政府系絡みの事件は、ともすれば政府が有利になってしまう。一方、昔だったら泣き寝入りしていたけれども、いまは泣き寝入りしなくなっている。庶民の側からの突き上げで公民社会は台頭しているのです。

### 裁判にこぎつけるのが大仕事

河南省の省都、鄭州市に陳情の女性として有名な李春霞という女性があります。彼女は自分で、「権利は闘って勝ち取るべきもの」というブログをつくっています。

彼女は、女性向けラップズボンみたいなものをつくる会社を経営していた。その会社が、取引先の未払いで経営が悪化した。裁判所に訴えるものの、賄賂を要求された。最初は払っていたけれども、その賄賂が裁判所の職員たちの旅行費用に消えていたことを知って、断った。そうしたら裁判をやらなくなって、結局、倒産した、というのです。

2005年に倒産して、早速、地元の政府、つまり鄭州市の政府、裁判所やメディアに訴えたのです。ところが、さっきも言ったとおり、政府と裁判所とメディアは友達ですから、全然相手にされない。北京に陳情に行き、日本などの大使館や温家宝がいそうなところなど、いろいろ行ったわけです。彼女は先に挙げた「市民社会、民主化よりは温家宝」みたいな方向の人です。日本大使館に行ってもどうしようもないとは思いますが、とにかく断られ、たらい回しにされました。

仕方なく天安門広場で自分の惨状を訴えるビラをまいた。200枚ぐらいまいて捕まってしまった。よく200枚まけたと思いますけれども、ビラをまいたことでニュースになったのです。どんなビラだったかという内容が当然ニュースになりますから、河南省政府がびびってしまった。副市長が彼女と面会し、ちゃんと補償するからと言って裁判が実現して、賠償金も受け取った。

黙っていたら、この人は損するだけだったので。天安門広場でビラをまいたからこそ浮かばれたわけです。だとすれば、多くの人が果敢な行動に出ていく、彼女が言うように、「権利は闘って勝ち取るべきもの」という感じになってくる。いま、彼女は自分の裁判は終わっているのに、他人

の裁判の手伝いばかりしている、こういう人が少しずつ出てきている。

中国ではともすれば、政府が関わる事件になると、法というルールが通用しなくなる。人権擁護活動といっても、日本と中国では違うのです。

日本の場合、弁護士の仕事は、裁判で勝つために、いろんな知力を使って、いろんな妨害や障害を排して、裁判に勝つことです。ところが、中国の場合は、勝訴を目的にしているわけではない。まず裁判を成立させることが必要なのです。

政府絡みの事件だと、まず起訴を受け付けられない。窓口に「×」と書いていたり、「しばらく休みです」となっていたり、起訴を受け付けられない。かわりに警察には通報する。原告が拘束される可能性もあるので、そうならないように、あらかじめメディアとかネットに、これから裁判所に行くよと知らせる。そうしたら、失踪しても、裁判所で何かあったらとわかるので、メディアにアピールしたり、ほかの政府機関に訴えたりしながら、裁判を実現させるまでが大仕事です。だから、政治的、暴力的にならざるを得ないところが出てくるのです。

前に、日本の人権系の弁護士を、中国の人権系の弁護士に紹介したことがあるのですがけれども、中国の人権系の弁護士とはかみ合わない。大分違うのです。

中国では、公的に判断するルールや機関がなかなか存在しない中で、法は必要ですと主張しながら、裁判をやっていく、そういう感じなのです。つまり、勉強の仕方がわからないで勉強している感じなのです。そういう大変さがあるのです。

公的なルールをつくってほしい。パン屋さんだったら、おいしいパンをつくれれば浮かばれるように。そういう公的なものが必要だと考えられているのです。

### 芽生える公共意識、下からの民主化

深圳に、出稼ぎ労働者の待遇を改善する労働法の学習サークルがあります。中国の出稼ぎ労働者は、僕も昔からつき合いがあるのですが、権利の主張がすごく強い。でも、昔だったらこんな学習はしないのです。自分の収入を上げるために、昔だったらそでの下を使ったり、密告をしたりして、自分だけもうけようと考えていたのです。

この学習サークルはそうではなくて、いろんな工場を代表して来ている。それで、日本企業も含めてストをすべきだというようなことを考え出している。もちろん権利意識もあるけれども、公

共に働きかけたいという意識が、従来と違う一面なのです。

本で書いたこともあるのですが、B型肝炎の感染者の母子に、感染しても幼稚園で学ぶ権利があるんですよ、もし幼稚園を断られたら裁判所に訴えることができるんですよ、というピラを配る、反差別対策のNGOの活動があります。

農村なんかではともすれば、裁判所とは裁判をするところだと思っていない。現実問題、自分たちを懲らしめる場所ぐらいにしか思わない。いま大分よくなっていますけれども、ちょっと前まで、裁判所の裁判官は必ずしも法のプロでない場合があります。政府の関係ない部署の役人の天下り先だったり、元警察で裁判官になったり、いろんな人が入ってくるわけです。そういうところで、裁判をする意識を農民に教える活動も出てきているのです。

この写真は、北京緑十字というNGOの会議です。村を開発するために、将来こういう村をつくりましょうという見取り図が置かれている。座っている男性はこの集落のボスですけれども、その後ろに農民、村民がたくさんいて、全体会議を開いています。政府だけじゃなくて、村民と全員で話す。それでいろいろ村を変えていく、こういう動きも出てきている。

いろいろな社会活動が出てきているときに、政府とNGO、民間活動はどういう関係にあるのか。民衆側は、権利主張が高まっているし、公共をよくしたいという意識です。政府だけに任せてはこの社会はだめになるんじゃないかという発想もあって、法律とか政策、制度の支えがなくても下からの民主化的な形で、割と社会活動を進めている。

### 民間を活用できない政府

一方、政府はそういうものの力を認めているけれども、なかなか活用できていないのが現状です。

もちろん貧しい地方では、民間を積極的に利用したい地域もある。四川地震のときなんか、猫の手も借りたいと、ボランティアを重要視していた。それに広東省とか先進的なところは、積極的に民間を使おうとしつつある。

けれども、現状ではやはり、政府がNGOに対して拘束や暴行、監視、閉鎖をしたりすることが多い。

政府の中で「NGOや民間はおもしろい、これからは民間の時代ではないか」と考える人の中には、民間の担い手を大切にするのはではなく、「政

府もNGOをつくったらどうだ、そうしたらもうかるじゃないか」と考える人がいます。そこから増えてきたのが政府系NGO。これが中国には多い。特に日本が招いているようなNGOに多いわけです。アメリカなど海外の基金も関わってきますから、政府系NGOにとって民間NGOは邪魔になる。だから妨害をしていく、そういう問題が一つあるのです。

もう一つは、民間が勢力を伸ばしてくると一党独裁にとっては怖いので、規制に乗り出してくる。新聞などでもよく出てきますけれども、人権活動家たちの拘束、暴行とか、NGO閉鎖とかいろんなものがある。

中国の弁護士との打ち合わせはすごく難しい。2011年のジャスミン革命のときはかなり長く拘束された人権派の弁護士の場合、食事会という形をつくって打ち合わせをしなきゃいけない。

先ほどのB型肝炎のNGOに対して、警察はいろんな名目をつけて取り締まりをします。例えば、シンポジウムでパンフレットを配っているが、もしかしたらパンフレットを売っているんじゃないか、だとしたら出版の規則に反する。そういう疑いをかけて立ち入り検査をする。警察自体、売ってはいないと薄々わかっているんですね。ここが怖いところなんです。売っていないとわかっているけれども、売っているんじゃないかと検査する。当然、パンフレットを没収し、それらは返却されない。そうなる政府が怖くなる。取り締まりはそれが狙いなのです。

13億も人口がいるところで、いろんな問題があるときに、政府が放置する問題が多いというのは当たり前です。だから、民間をいかに取り込んでいくかというのは、重要なんですね。ところが、現状ではそうになっていない。規制ばかりしているような印象があるんですね。

### 何もしなければ何も変わらない

公民社会のありようには、多くの課題がある。まず政府との関係が悪いために、集会を告知することがなかなかできない。広く告知すると捕まってしまうので、メーリングリストか何かで呼びかけるしかない。親しい人の内輪で盛り上がるだけの会みたいなのが中心になってしまう。そうすると、力も限界がある。

暴動などを見ても、いろんなニュースが報じられるけれども、それぞれが集まってより大きな力になりえない。それが現状なのです。

ビジョンもよくわからない。自由主義を目指し

ているのか、社会主義を目指しているのか、ばらばらです。例えば東ヨーロッパの民主化のときは、ワレサたちが民衆の中心的な存在として立ち上がった。けれども、中国の場合、誰が民衆の代表なのか。少なくとも劉曉波ではないのではないのか。

さっき挙げた人たちにとってみれば、代表は、劉曉波というよりは、むしろ温家宝、さらに言えば毛沢東になってしまうわけです。そうすると、民主化といっても限界が出てくる。

北京でポーランド民主化の知識人を招いたときに集まる中国の人たちと、鄭州の環境・貧困問題のNGOの集會に集まる人とは、思想的にも結びつき得ないし意見対立をする機会さえない、そういう問題があると思います。

滕彪（タン・ビャオ）という、中国の人権派弁護士たちのブレイン的な人がいます。彼が言うのは「中国の人権状況が改善するかどうかは今後の民間の力しだいだ。その間にたくさんの人が捕まり、妨害されるだろう。でも、何もやらなければ何も変わらない」ということです。

日本としても、ベトナムとか、モンゴルとか、香港とか、そういう周辺の国・地域と同じように、中国の今後に関して何かやれることはあるかもしれない。何もやらなければ何も変わらないのは確かだと思います。

滕彪さんは、北京にいるとき常に監視され、軟禁状態みたいになっていた人です。僕は彼と3回ぐらい北京で会ったことがあるけれども、常に監視がついている。だから、ろくにゆっくりしゃべれなかった。

香港でこの4月に初めてゆっくりしゃべることができました。香港が2017年に行政長官の直接選挙を控えて、中国の人権状況に対して問題意識が高まってきている中で、北京ではなかなか活動できないこういう人たちが香港に来ている面もあるのです。

中国の民間の中で、公民社会が立ち上がってきた。もちろん権利があるけれども、ただ、これがいい方向に働くかどうかはわからない。でも、とにかく何かしないと何も変わらない。以上でひとまず終わりにしたいと思います。

## 《質疑応答》

**質問** 高まる庶民の権利意識の受け皿として、NGOや人権派弁護士が活躍している一方で、政府は締めつけや監視を強化している状況だと思います。今後、こうしたNGO団体がどの程度力

を持ってくるのか、その辺の見通しを教えてください。

また、麻生さんは、中国への入国を拒否されていますが、その状況を教えていただければと思います。

## 増えるNGO活動、でもばらばら

**麻生** いま中国では、問題を抱えつつもNGOや人権活動家の支援を受けない人たちは、暴動に走るしかない状況だと思うんです。だから、問題を抱える人が増えている分、規制がどんどん強くなっているにもかかわらず、NGOや人権活動活動はどんどん増えているんですね。

僕は、ここ3~4年は大体年に4回ぐらい河南省に行っていたのですが、河南省だけで言ってもこういうNGO活動、ボランティアの人たちがどんどん増えているんですね。活動自体は非常に増えているけれども、一つ問題なのは、ばらばらでしかない。非常に熱心だけれども、連帯していない。

中国の中で、そういうものを結びつけるためにサロンという活動が2~3年前から盛んになってきた。公共活動家たちが、一堂に集って食事会をして、少し横のつながりが出てきた。そうすると非常に強くなるんですね。

最近中国で「原発反対」のデモが起きましたが、工場建設を中止させたのですから、地域運動としては成功したわけです。ところが、いまの中国は、そこから原発自体をどうするかを全国的に考えるという方向には行っていない。やっぱりばらばらなんです。だから、本当に力をつけるためには、ネットワークがつくられないといけません、現状では全くできていない。

先に挙げたサロン活動も、今年になってものすごい取り締まりを受けています。いま北京で人権擁護関係者の4~5人が一緒に会うのですら大変な感じです。だから、見通しとしては非常に暗いけれど、活動自体は増えている。点がやたら増えている。点が面になるのかもしれないけれども、いまのところはまだわからない。

入国拒否に関しては、こういう草の根的なものを追ってきた中で、地方政府のブラックリストに幾つかばくの名前が挙がっていると聞いたことがあります。一つ一つを見るとブラックリストとしての優先順位はそう高くないのかもしれないけれども、「こいつの名前は安徽のリストでもあるじゃないか、湖北のリストでもあるじゃないか」と言った具合に、それらが重なって入国が無理に

なったのかなと推測をする中国人もいるんですね。

中国版ジャスミン革命のときもそうだけれども、例えば滕彪さんは拘束されて、北京で暴行も受けたんですね。一方で、同じようなことをして全然捕まっていない人もいます。

法治国家だったら、疑いがあるならみんな捕まえる。でも、中国の場合、一方では捕まえるけれども、一方では捕まらずに、堂々と海外旅行して帰って来れたりするように、捕まる人もいれば捕まらない人もいます、それが政府にとって権威を保つ方法ですよ。つまり、法を超越している。誰でも法に反したらみんな入国できないというほうが楽ですよ。法に反しても警察の気まぐれで入れたり、入れなかったりするほうが、より警察の権力は強くなる。

そういう意味で、僕が入れなかったのは気まぐれな面もあると思うんです。たまたま何かのしゃくにさわったのかもしれない。メディアでも報じられましたが、今回、警察に言われたのは「理由は前回と同じである」と。「前回理由を聞いていないので教えてくれ」と言ったら「知らない」。それだけです。

**質問** 北京の庶民と話していると、不動産の価格が高いとか、若い人の就職が見つからないとか、大気汚染がひどいとか、不満の声が結構出る。けれども、経済が伸びて、生活も少しよくなって、給料も少し増えているので、不満が爆発するところまではいかないという感じでした。最近、中国の経済が少し鈍化していると思うのですが、政府は庶民の不満をどうコントロールしていくのでしょうか。

### 庶民の不満にアメとムチで対応

**麻生** いまおっしゃった不動産とか、就職というのは、どこの地方でも抱えている問題だと思います。それに対して政府がどうするか。とりあえずは所得倍増とかなんとか打ち出してはいるけれども、実際そうなりそうな感じは全然ないわけです。不満の爆発に対し、警察力で抑えるのが最大の対策であるのが現状です。

もう一つ、アメとムチを使い分けるようなところがある。例えば誰かが捕まったときに、同業者に対しては、もしこれに関して文句を言わないんだったらおまえたちには優遇してやるとか、そういうことをやるんです。

警察力や巧妙なやり方で乗り切っているとい

うか、現状維持をしている。それ以外の対処が見えてこないのが現状ではないかと思うんですね。

**質問** 貧富格差に不満を持つ人たちに2つのタイプがあり、BがクローズアップされるがAのほうが人数としては多いというお話でした。AとBのタイプに、世代や階層、バックグラウンドで、何か特徴があるのでしょうか。今後、この割合は変わっていくのか、その兆しがあるのか教えていただければと思います。

**麻生** 正確な割合はよく知らないんですけれども、陳情などに行く人は、弁護士とかの裁判を得たいと考えているので、法治国家化は必要だとか、裁判を受ける権利はあるとかいう話はするんですね。だからB的な話もしている。

もともと何にも考えていなかったような人の中から、裁判は必要だ、法治国家化が必要だと言いつくような人が出てくるわけで、Bが増えていくと思うんですね。つまり一党独裁への不満という方向になっていく。

でも現状では、農村、地方都市に行くと、Bはあまりいない。農村の戸籍を持つ人や、ブルーカラー的な人では、やはり社会主義的なものを求める人、Aの割合が世代にかかわらず多いと、僕は個人的には思うんですね。

ただ、そういう人の中で、権利に目覚めた人たちが、法とか公民の権利とか民主化とかを求め始めている。そういう感じがしているので、だんだんBが増えていくのではないかなと思っています。

**質問** 劉曉波氏や李春霞さんのお話がありましたが、今後、市民のリーダーとなるような人が出てくるのでしょうか。それともやはり、当局の規制などによって、リーダーはなかなか現れないのでしょうか。

### カリスマ性ゆえに捕まえられる

**麻生** よく言われているのが、艾未未さんと、滕彪さん。ほぼ同時期に捕まったんですけども、彼らが捕まったのはカリスマ性からだということですね。この2人は、ちょっと違うタイプですけども、オピニオンリーダーになっていくタイプの人で、それを早々と潰している。

7月中旬に、許志永さんという、滕彪さんの同業者が捕まっていますけれども、やはりカリスマ

的な存在を潰している。

そうやって捕まっている人たちを見れば、どう  
いう人がカリスマ的な人なのかがわかるかもし  
れないですね。

ある事件をきっかけに捕まっているとか、ある  
ことをやったから捕まっていると報道されたり  
しているけれども、実際は最初から捕まえる準備  
をしていて、何かこじつけられる出来事があつた  
から捕まえているみたいな感じだと思うんです  
ね。一回捕まってしまうと、滕彪さんみたいに大  
陸の中ではあまり活動ができなくなるので、勢  
力を伸ばしていくのは難しいのが現状ですよ  
ね。だから、なかなかリーダーが出てこない。

さっきも言ったように、求めているものがAと  
Bみたいに分かれている、というのもあるけれ  
ども、AにせよBにせよ、いずれにしろという人  
材がまだ出ていないなという気がいたします。

**質問** 公民社会への変化は不可逆的だと思う  
のですが、延々とモグラたたきのような状況が続  
いていくのか、それともだんだん民主化の方向に  
向かっていくのか。あるいは、どこかで革命的な  
動きが起きて、体制が大きく変わることがあ  
り得るのか。

### 公民社会へ時間かかる改革

**麻生** これは僕の考えですけれども、しばらく  
はこういう状況が続かざるを得ないと思うん  
ですね。革命といっても代替になるようなもの  
が、まだ出てきていない。変わるとしたら体制  
内改革しかないけれども、そんなに簡単に公民  
社会的なものを取り込んでいく社会になるとも  
思えないのです。問題を抱えつつじりじり時  
間が過ぎて行くような、何か放置した虫歯み  
たいな感じなのかなという気はいたしますね。

僕自身は、どちらかというと活動家的なところ  
があるので、どうなるかというより、どうする  
べきかと考えるところがあって、個人的には民  
主化してほしいけれども、なかなか……。

例えば、滕彪さんは、香港中文大学で授業を  
していますが、学生が「どれくらいしたら人権  
状況はよくなるんだ、香港のレベルになるんだ  
」と聞いたら、「100年かな?」とか言っていま  
した。どれだけ時間がかかるかもわからないで  
すね。

ありきたりな答えになったかもわからないけ  
れども、この状況が続く可能性は高いのかな  
と思います。

**司会** 麻生さんには、「愛在人間」と揮毫して  
いただきました。どういう意味でしょうか。

**麻生** 愛は人の間に存在する。北京にダウン  
症の子どもたちの学校があります。政府からの  
予算が減ったために、ボランティアの人が自分  
の財産を出してやっている学校です。その先生  
が、この言葉を書いていたとき、「人間」とい  
う言葉の一つの意味を見たなと思って、好き  
な言葉になったんです。

いま、中国って、「人の間に愛がある」とい  
う社会ではなくなりつつあるのではないかと  
も思うんです。そういう中でも、ダウン症の  
人のために尽くす人もいるんだ。そういう意  
味も込めて書かせていただきました。

**司会** 麻生さん、きょうは大変ありがとう  
ございました。（拍手）

（文責・編集部）